

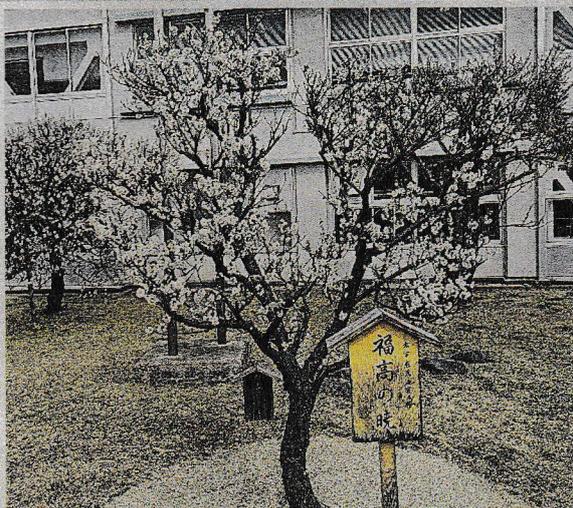
太宰府から福島高

「復興の梅」10年目

福島市にある県立福島高校の正門の近くに、太宰府天満宮（太宰府市）から贈られた梅の木が植えられている。神社以外に譲られることは珍しいが、東日本大震災で被災した学校と生徒たちを応援しようと、5本の木が贈られて今年で10年目。梅の木をきっかけとした交流は、いまでも続いている。

2011年3月11日、福島高があしらわれ、地元では「梅校は激しい揺れに襲われ、校舎高」とも呼ばれることから、同4棟のうち、柱にひびが入るなどして2棟が使えなくなった。「どうせ贈るなら、日本一の梅生徒たちは体育館や仮設の校舎で授業を受ける日々が続いた。ただし、天満宮の梅の多くは不自由な生活を送る高校生たちに、自信と誇りにつながるものを贈りたい」。震災の発生から2年後、同校の同窓会はその思いから、梅の木を分けてくれたいかと太宰府天満宮に依頼した。福島高校の校章には梅

を」と考えたという。人々が思いを託して献梅したもので、神社以外に贈られることは少ない。当時、権禰直だった毛利清彦さん（64）は梅の木を長く、丁寧に管理してくれるのなど、懸念も持っていたとい



①太宰府天満宮に献梅した福島高校同窓会の関係者たち ②2月25日、太宰府市宰府4丁目 ③太宰府天満宮から福島高校に贈られた梅の木「福高の暁」 ④2022年3月、福島市、篠木雄司さん提供

同窓会の熱意 校章の縁 つないだ人の輪

初めに目に見えるよう、正門の入り口近くに梅を植える場所を確保。その熱意は、毛利さんたちにも伝わった。「梅高」との愛称や梅の校章にも縁を感じたという。

当時の宮司が依頼を承諾し、準備が進んだ。渡すことになる5本の梅の木は、毛利さんが選定。14年2月、1千キロ離れた福島までトラックで運んだ。このうち1本は、福島高校の略称「福高」と震災からの「復興」をかけ、生徒たちによって「福高の暁」と名付けられた。

さらに同窓会は梅の木の管理にかかる費用を確保するため、「太宰府梅基金」を設置。天満宮に剪定を依頼するなどして、交流を続けてきた。今年2月25日には、梅の木が贈られてから10年目となることを記念し、篠木さんら同窓会の関係者約20人が太宰府天満宮を訪れ、献梅した。

篠木さんたちは、すでに退職していた毛利さんの実家の神社にも行き、酒を酌み交わした。震災の発生から、12年。毛利さんは「不思議なご縁」と話しつつ、こう強調した。

「（原発事故で）文化や歴史、街がつくってきたものがすべて空白になってしまったが、寒さに耐えた梅は春を告げるエネルギーをもち、人と人をつなげる力がある」

梅の木の縁は、これからも続く。（杉山あかり）